

『華嚴經』「入法界品」における善知識の過去世物語

大谷大学短期大学教授 一色 順心

はじめに

六十巻本『華嚴經』「入法界品」には、善財童子が五十五人の善知識を歴訪する求道物語が説かれております。善財童子が訪ねた善知識は、菩薩・比丘・比丘尼・長者・良医・優婆夷・仙人・婆羅門・国王・夜天など多岐にわたるものでありますが、第一番目の善知識は文殊菩薩であり、最後は第五十三弥勒菩薩・第五十四文殊菩薩・第五十五普賢菩薩と次第します。

善財童子は、各々の善知識に「私はすでに菩提心を発しましたが、どうかお願いですから菩薩行・菩薩道とは何かについて教えてほしい」と問います。対して善知識の方は、善財に自身の所得の法門を語った上で「自分はこの法門を知るのみで、どうして大菩薩の境地までを知り得ようか」と告げます。そして善財に次の善知識を指し示すのです。



【写真1】『華嚴五十五所絵巻』 東大寺蔵〔『続日本絵巻大成』10 中央公論社〕

「入法界品」は、従来、前半部分を「本会」、後半部分を「末会」と称されてきました。前半の「本会」では、祇園精舎が世尊のおいでになっていた場所となっていますが、「末会」では世尊のもとを辞した文殊菩薩が南方に移動して、その場所で善財童子と出会うことになり、文殊の指南により善知識歴訪の旅が始まるのです。

この旅物語は、奈良の東大寺所蔵の『華嚴五十五所絵巻』にも画かれています。これは鎌倉時代、十三世紀ごろの制作といわれるものです。それによりますと、第一番目の文殊菩薩と善財童子の出会いの場面が【写真1】のように画かれています。真ん中の座像が文殊菩薩、そして右のところに善財童子の姿が描かれています。

また、中国の宋代、十二世紀の初めごろだと思われますが、善財童子の南遊求法を絵図であらわし、仏国禪師惟白という人物が「讃」を加えたものが残されています。それは『文殊指南図讃』というもので、『大正

『新脩大藏經』の第四十五卷に収録されております。本学の博物館に所蔵しているものは、『写真2』のもので、このような最初に序があり、そして画面が四面ありますが、一番最初の画面が文殊菩薩です。このような『文殊指南図讃』というものが本学の博物館に所蔵されています。もともとこれは中国の南宋代の刊本が原本なのでありますが、今日の研究によりますと、日本に伝来しているテキストは、中国の原本は数少ないのだそうです。大東急文庫ですか、そこにあるものが中国の原本のようであります。本学所蔵のこの『文殊指南図讃』も、我が国で刷り直されたものではないかという指摘のある論文が発表されています。(椎名宏雄論文『仏国禅師文殊指南図讃』の諸本)『華嚴学論集』鎌田茂雄博士古稀記念会編 大蔵出版社刊)

最近、古書店の目録に、江戸時代の雲臥という人物が『華嚴善財童子南詢撮要』という書物を著しているということを知り、それを入手しました。それが【写真3-1】であります。江戸時代の刊本ですが、この書物の最初の部分には、善財童子の「絵」が掲載されています。また後半の末尾【写真3-2】の方ですが、江戸時代の「明和九年」(一七七二年)、尾張東般若台の「雲臥」と記されています。現在の名古屋市在住の学僧が著したものであることがわかります。この書物は、五十五人の善知識の一人ひとりを取りあげてあるわけではありませんけれども、私にとってはたいへん珍しい書物でしたので、少し紹介させていただきました。いろいろな論文の目録などをみておりまして、なかなか掲載されていないものがたまたま入手できたものです。

仏像彫刻の方面で、善財童子が表現されている場合には、「文殊菩薩五尊像」、あるいは「文殊菩薩騎獅像」の一部として登場しています。本尊が獅子の上に乗った文殊菩薩像で、その脇侍の四体の内に、善財童子が含まれているのです。【写真4】は、東京国立博物館に所蔵の「文殊菩薩五尊像」であります。一番右側の像が「善財童子像」です。この「五尊像」は、もともととは奈良の興福寺にあったものが、後に個人の所蔵となり、現在は東京国立

佛國禪師文殊指南圖讚

中書舍人張

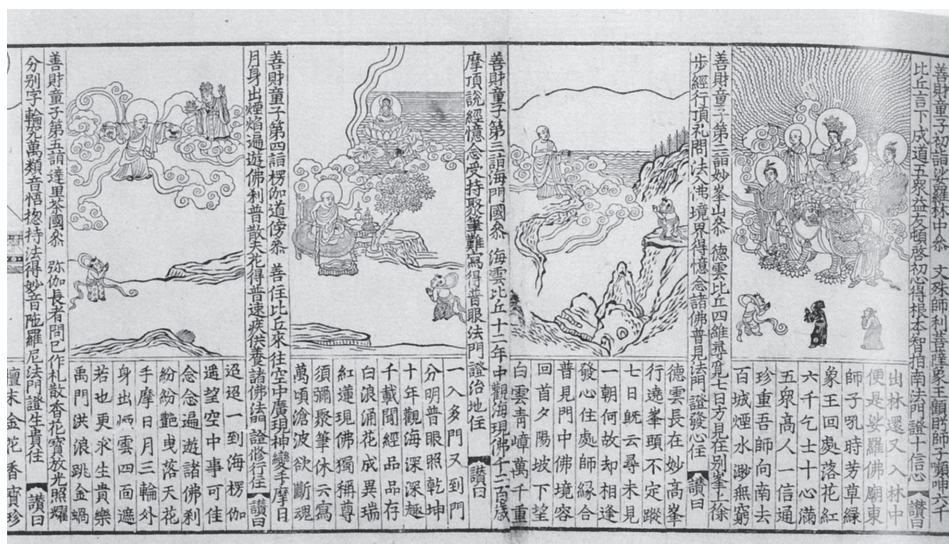
龔

述

華嚴性海納香水之百川法界
義天森寶光之萬像極佛陀之
眞智盡含識之靈源故世王妙
嚴文殊結集龍宮誦出難嶺傳
來繼踵流通普聞華夏李長者
合論四十軸觀國師疏鈔一百
卷龍樹尊者二十萬偈佛國禪
師五十四讚四家之說學者所
宗若乃撮大經之要樞舉法界
之綱目標知識之儀相述善財
之悟門人境交叅事理俱顯則
意詳文簡其圖讚乎信受奉行
爲之序引

〔『大谷大学図書館所蔵貴重善本図録—仏書篇—』大谷大学〕

博物館に保管されています。写真家の一人に藤本四八という人がおられました。一九一一年生まれの写真家でありますが、この善財童子像だけをアップにした【写真5】があります。こういう善財童子だけをアップにしたものが、藤本四八という人によって撮影されました。この善財童子の像の写真は、『日本の彫刻 上古鎌倉』（美術出版社 一九六〇年刊）という書物がありまして、そこに収録されています。この左側の写真が日本全国に比較的流布した写真であります。藤本四八という写真家は、長野県飯田市の出身です。飯田市美術館に収められていることのようでもあります。このような「文殊菩薩五尊像」は、鎌倉時代ごろから制作されていたようでありまして、日本全国の寺院の何箇所かに残されています。一年ほど前に、奈良の桜井市の安倍文殊院の善財童子像が、東京国立博物館で一般公開されました、ブームとなったことをおぼえておられるのではないかと思います。この「五尊像」の仏像形式には、西大寺の観尊という僧が、その流布に影響を与えているよ



【写真2】『仏国禅師文殊指南図讃』 大谷大学博物館蔵

うであります。

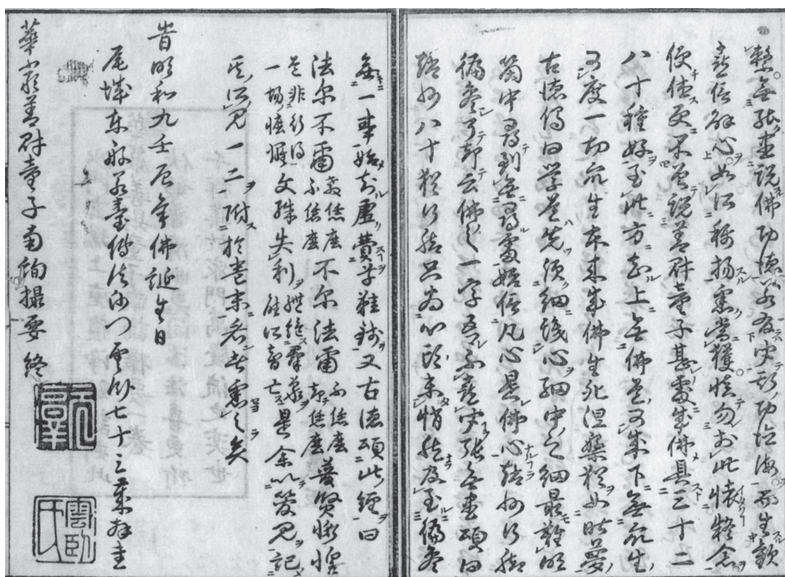
今回の講演では、「末会」に登場する五十五人の善知識の中でも、夜天善知識を取り上げること、多くの善知識が登場する中で、九人の善知識のことが説かれている箇所、「入法界品」のどのような問題が語られているのか、その一端を話させていただきたいと思います。また「入法界品」には、主要な漢訳に三つ、そしてサンスクリット語訳、チベット語訳などのテキストがありますけれども、各々のテキストに微妙な相違点がありまして、なぜそうなっているのかといった私なりの疑問点についても触れてみたいと思います。また今回のテーマに「過去世物語」とつけましたが、九人の夜天善知識の箇所には、善知識自身が自らの過去世を豊かな表現を用いながら説いていますので、その内容についてお話ししたいと思います。

一、九夜天の居所と釈尊ゆかりの地について

今回の「発表資料」の最後に、五十五人の善知識の「表」としてごまかせていただきました。これは各種テキストの善知



【写真3-1】『華嚴善財童子南詢撮要』川名山般若台藏版



【写真3-2】『華嚴善財童子南詢撮要』川名山般若台藏版



【写真4】「文殊菩薩五尊像」東京国立博物館蔵
〔『日本の美術314文殊菩薩像』金子哲明 至文堂〕

識名の対照表と、「六十卷本華嚴經」のものと、サンスクリット語現代語訳の『さとりへの遍歴』上下巻のものです。「六十卷本「入法界品」の善知識」という「表」を見ていただきますと、左から「善知識名」（善知識の名前）、それから「国訳大藏經」第七卷のページ」、それから「善知識の居所」（どこにいたのか）、それから善知識が体得している「所得の法門名」であります。

「九夜天」とは、三十二番目から四十番目までの九人のことを指します。ただ四十番目の「妙徳円満天」は園林に住む天人で、夜天とは書かれていないのですけれども、いちおうこれも含めて「九夜天」と称しています。この

「九夜天」と次の第四十一番目仏妃瞿夷夫人、第四十二番目仏母摩耶夫人の箇所では、いずれも経文が非常に長くて、それぞれの善知識の中に仏教のいろいろな問題が含まれているといえます。佐々木月樵先生がお作りになりました書物に「九夜神と仏妃」（『日本文化経典』第三編 華嚴經 大正十年五月 丁字屋書店刊）が出版されています。それはこの【写真6】の体裁です。佐々木先生は、この九夜天や仏妃が「入法界品」に登場することを、早い時期からすでに注目されてきました。この箇所の経文をぜひ読んでほしいという先生の願いが込められていると思います。しかし、この書



【写真5】「善財童子像」東京国立博物館蔵〔『日本の彫刻 上古-鎌倉』美術出版社〕

物は、テキストを提供しようとしたものですので、佐々木先生ご自身の見解が示されているものではありません。

唐の法蔵(六四三-七二二)の『華嚴經探玄記』卷一の解釈によりますと、五十五人の善知識を「五相(五つのすがた)」に分ち、この「九夜天」と「仏妃瞿夷」の合計十人は、菩薩十地に相当する善知識であると捉えています。「入法界品」自身の経文からは、直接的に菩薩十地のそれぞれの位地に明確に当てはまるとは言いづらい面もありますが、少なくとも善財童子の求道と善知識自身の教えが深まりをみせてきている箇所だと考えられるのです。

諸善知識の中で、初めて天人あるいは天神が登場するのは、第三十番目の「大天」という善知識であります。それ以前の善知識は、すべて地上界を居所としているものであります。「大天」もいちおうインドの「婆羅波提城」にいたとありますから、天人でありながら地上の善知識ということになるでし



【写真6】「九夜神と仏妃」佐々木月樵編『日本文化経典』丁字屋書店

よう。

ところで、第一善知識の文殊菩薩は、祇園精舎から南方に移動して、「覺城の東、莊嚴幢娑羅林の中の大塔廟処」に至ります。この辺りで、文殊は善財童子と出会うことになります。文殊の指南によって次の善知識が指し示されて、善財は南方へと旅を続けます。第三十番目の「大天」までの善知識たちの居所は、現在のインドの地名として特定できないものがほとんどであったのに対して、「九夜天」の場合は「迦毘羅城」(カピラ城)、「摩竭提国」(マガダ国)、「魔竭提国菩提道場」、「流弥尼(ルンビニ)園林」となっています。つまり、釈尊の青年時代の地や成道の地や誕生の地などを居所としているのです。

これまで南方へと遊行してきた善財童子は、「安住道場地神」に出会うことで、「摩竭提国」(マガダ国)という国に来ているということになります。また、釈尊ゆかりの地を居所としている夜天たちを善

財は巡っているのがあります。

「入法界品」という經典の設定のあり方として釈尊ゆかりの地を盛り込んでいるところに、大きな意味があるのではないのでしょうか。そこには祇園精舎におられる釈尊のさとり、つまり「師子奮迅三昧」の境地の問題との関わりや、善財の求道の歩みが、どこまでも釈尊の精神に帰っていくというものではないかという問題と関わっているのではないかと思われます。

二、善財童子の出生・出身の場所について

少し話はずれるかもしれませんが、善財童子はどこに生まれ、どこ出身の人だったのでしょうか。先ほど述べましたように、文殊が善財と出会った場所は、六十巻本では、「覚城の東、莊嚴幢娑羅林の中の大塔廟処」でしたから、善財はこのあたりで出生し、ここを出身地として考えてよいと思われます。

「覚城の東」とありますので、私は、マガダ国の「ブッダガヤ」、つまり釈尊の成道の地を指すのかなと思っていました。しかし、どうもそうではなかったようです、法蔵の『華嚴經探玄記』巻第十八では、「覚城」について次のように解釈しています。

又、日照三蔵が云く「此の城は南天竺に在り。城東の大塔は是れ古仏の塔にして、仏の在世の時に已に此の塔有り」と。

（『華嚴經探玄記』巻第十八、『国訳一切経』經疏部十、二八九頁）

また、『さとりへの遍歴』上では、文殊のいた場所が、

ダーニヤーカラ（福城）の東、ヴィチトラサーラ・ドヴァジャヴューハ（多様な娑羅樹の幢の莊嚴、莊嚴幢娑

羅) 林の塔廟

(『さとりの遍歴』上、九四頁)

と示されています。これによれば、善財童子は南インドに生まれ、そこが出身であったようであります。善財が南インドの出身であることについて、花園大学におられました小林田照先生は、

一応、南インドのクリシュナ河下流のアンドラ国ダーニヤカラ（あるいはダーニヤカタカ・現今のアマラーヴ
アティー付近）と見なすのが自然であろう。

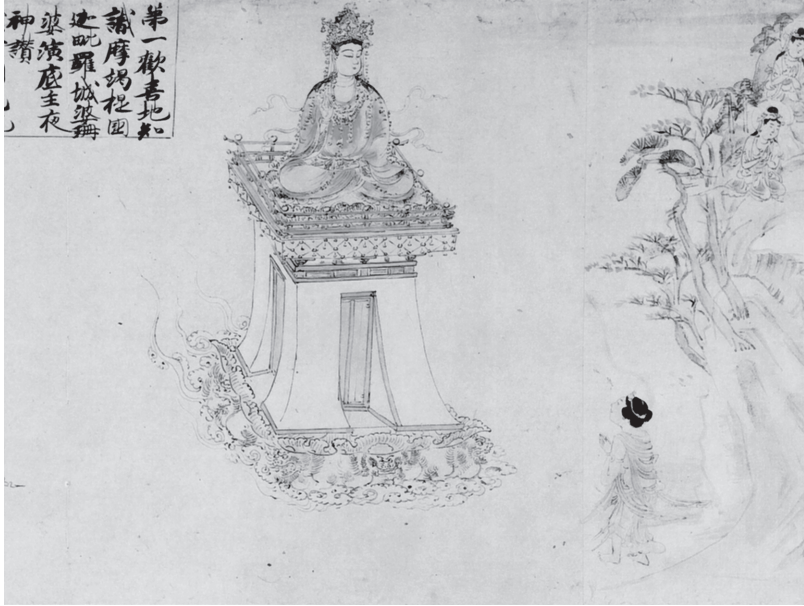
（小林田照「アジアを駆け巡る善財童子『華嚴經入法界品』の思想と文化」『論集 華嚴文化の潮流』七頁 東大寺刊
二〇一二年十二月）

とまで、場所を特定して述べられています。この説によりますならば、善財の出身地は、「南インドのクリシュナ河下流のアンドラ国ダーニヤカラ」ということになります。それはブッダガヤよりも何百キロも離れた、はるか南方の方角に当たるといことになりますが、どうしてそこまで特定できるのかは、私にはわからないということが正直なところであります。

三、夜天について

次に、「夜天」とはどのようなものでありましょうか。六十巻本『華嚴經』の世間淨眼品第一、つまり『華嚴經』の冒頭部分に、摩竭提国の寂滅道場に釈尊がおられたとき、多くの聴衆たちが集まる場面が出てまいります。

復た無量の主夜神と俱なりき。其の名を妙光神、淨光神、善觀衆生神、靜時堅固神、方便勝具神、生一切樹果神、無尽眷屬神、主知樂淨遊戲神、和諍神、淨福具神と曰えり。是の如き一切のもの、助道の法に於いて深重



【写真7】『華嚴五十五所繪卷』 東大寺蔵〔続日本絵巻大成〕10 中央公論社

に愛樂せり。

(六十卷本『華嚴經』世間淨眼品第一、『国訳大蔵經』經部第五卷、八頁)

と冒頭にありまして、多くの聴衆の中に夜をつかさどる神(主夜神)もいたと説かれています。インドの人々の世界観には、森羅万象にそれぞれの神がいるという考え方があり、夜を象徴する神がいるというのであります。この「主夜神」に相当するものが、入法界品では「夜天」だと考えられます。

ところで、先ほどにも紹介しました『華嚴五十五所繪卷』という絵巻物には、善財と諸善知識との出会いの場面が美しく画かれています。【写真7】は第一番目の夜天(第三十二善知識)「婆娑婆陀夜天」(八十卷本では婆珊婆演底主夜神)であります。身に付けている衣の色が朱色をしています。が、「入法界品」の経文をじっくり読んで画いていることはこの絵巻を見れば誰もが気づかされると思います。

そのことは夜天善知識の場面でも例外ではなく、



【写真8】『華嚴五十五所絵巻』 東大寺蔵〔『続日本絵巻大成』10 中央公論社〕

経文にもとづきながら画かれているといえます。天人であるという性格上、比較的空中のような高い位置に画かれていますが、夜天が女性のようなであったり、ときには勇ましい男性のようであったりして、男女の判別がつきにくいように画かれています。この「婆娑婆陀夜天」の場合には、非常に美しい女性っぽい姿で画かれているのでありますけれども、

【写真8】の「夜天」のところを見えますと、髪の毛が逆立ったような姿であつたり、また【写真9】の善知識の姿を見えますと、髭が生えているようですので、この善知識の姿からは、女性という感じが見受けられなくて、男性っぽい姿で絵巻には画かれているわけであります。

「入法界品」の夜天とはどのようなものであるかについて、唐の法蔵は、

【夜天】とは初会の中の主夜神等に同ずるなり。謂く夜中に在りても光を耀かして物を救うが故に、以て名と為す。証智が妙にして衆相を離れ



【写真9】『華嚴五十五所絵巻』 東大寺蔵〔『続日本絵巻大成』10 中央公論社〕

闇障を破することを表すが故なり。此の九種の
夜天は、梵本に依るに女天にして、是れ慈悲の
状を表すなり。

『華嚴經探玄記』卷十九、『国訳一切経』經疏部十、
四一三～四一四頁

とありまして、法蔵から見ると、梵本によって
みるところどうもこれは女性の天であるというよう
な位置づけをしているわけであります。この法蔵の
解釈によるならば、夜天は夜の中にあつて光明を放
ち、衆生たちを救うはたらきをする。また夜天のさ
とりの智慧がすぐれたものであり、衆生の迷いの暗
闇を破ってくれるというわけです。さらに法蔵は、
この九夜天は梵本によればすべて女性の天であり、
そのことは「慈悲」の精神を象徴しているというの
であります。大乘仏教のかなめとなるものが「智
慧」と「慈悲」であるとするならば、女性善知識で
ある「夜天」には、とくに「慈悲」の面が託されて
いることを窺うことができると思います。『華嚴五

十五所絵巻』の「夜天」の画き方は、男性っぽかったり、女性っぽかったりするようにバラバラですが、絵巻物の作者の方は、この法蔵の「女天」であるという指摘はよくわかっていなかったのかもしれませんが。

四、夜天善知識の経文の文脈について

先ほども申したとおり「入法界品」には、主な漢訳テキストに三種類、チベット語やサンスクリット語のテキストも現存します。近年、サンスクリット語からの現代語訳が『さとりへの遍歴』上下二巻（梶山雄一監修、中央公論社刊）として出版されており、私たちも恩恵をこうむっています。ただ、中国の法蔵の文脈の切り方とは、少し異なったものとなっています。

たとえば、第三十二番目の「婆娑婆陀夜天」は、『さとりへの遍歴』上（三六五頁）では、「第三十一章 第一の夜の女神ヴァーサンティー」に相当します。『さとりへの遍歴』の方は、善財がこの善知識に出会うために向かっていく場面を始まりとするのに対しまして、法蔵の場合は、前の善知識が次の善知識を指し示す場面を始まりとしています。そういう点で文脈の切り方が少しずれているといえます。このことは、他の善知識の箇所でも一貫してずれた状態になっています。

そこで法蔵の解釈を見ることが、それぞれの夜天善知識の箇所にはどのような内容が説かれているのかを、まず概観してみたいと思います。法蔵は、一人の善知識の経文を大分して五つの文脈があると解釈します。

戊一 法を挙げて修するを勧むるを明かす

戊二 教に依りて趣入するを明かす

戊三 見て敬い請うを明かす

戊四 法界を示すを明かす

戊五 仰ぎて勝進を推すを明かす

と、こういうような五つの文脈の切り方、その法蔵の文脈を簡略にして訳してみますと、次のようになります。

「戊一」では、前の善知識が善財に次の善知識を訪ねるようにと勧める。

「戊二」では、善財は前の善知識の勧めを受けて次の善知識の所に進み行く。

「戊三」では、善財は次の善知識のもとに到着して教えを請おうとする。

「戊四」では、その善知識は善財に対して自らの法の境地を教える。

「戊五」では、その善知識は自分よりもすぐれた「大菩薩」たちがどのようなはたらきをする方なのかを教える。と、このように次第していくわけです。とくに「戊四」の文脈が経文の大半を占めています。夜天たちは、善財に對して、自分は仏教のどのようなはたらき（業用）をし、どのような境地を体得しているのかを教え、どのような因縁（過去世）があつて現在に至っているのかを説くのです。とくに「戊四」では、夜天の教えの中には、自らの「所得の法門」だけではなくて、過去世物語が豊かな表現をもつて長々と語られていることに特徴があると思います。

五、夜天はどのような天人の姿として表現されているか

まず、善財が第三十二婆娑婆陀夜天と出会う場面を見ることで、夜天がどのような姿として表現されているのかを考えてみたいと思います。経文によれば、

爾の時善財、日没して未だ久しからざれば、一切の菩薩の教うる所に随順して一心に婆娑婆陀夜天を見んと欲し、善知識に於いて如来の想を發せり。(中略)彼の夜天を見るに、彼の城の上の虚空の中に於いて住せり。宝楼閣の香蓮華の座に処して身は真金の如く目髪は紺色にして端嚴殊妙なれば、見る者厭くこと無し。身に朱衣を服し衆宝もて莊嚴し、頂上に髪を結びたるは猶お梵王の如し。

(六十卷本『華嚴經』入法界品 大正藏九・七二〇中 第三十二婆娑婆陀夜天の箇所)

と、こういうように画かれていて、この『華嚴五十五所絵卷』には婆娑婆陀夜天の姿が非常に忠実に画かれていることがわかんと思います。九人の夜天の中でも、とくに婆娑婆陀夜天の姿については、非常に丁寧に表現されておりまして、女性として極まりを見せた表現が示されているといえます。先ほどの【写真7】にありましたように、この夜天の衣の色は、「朱色」で表現されています。しかも夜天という性格上、「日没して久しからざる」時間に現れるということです。

また、夜天が活動を開始する時間がどのような時で、どのようなはたらきを行うのかについて、第三十八開敷樹華夜天の箇所には次のように説かれています。要約してみると、

私は、日没の頃になって優鉢羅華や鉢曇摩華が花びらを再び閉じる時に、もし園觀に遊んでいた者が家路にく場合、私はその人のために光明を放って安心して帰ることのできるようにしてあげる。

衆生たちがさまざまな難処に遭遇した時には、私は光明を放って照らし、諸々の苦を免れさせ安穩の樂を得させてあげる。

(六十卷本『華嚴經』入法界品 大正藏九・七四一上 第三十八開敷樹華夜天の箇所)

というようになります。

以上のことをまとめてみますと、夜天は、天人だから地上ではなく虚空中に住し、その風貌は極めて「端嚴殊妙」

であり、日没に入ると「光明」を放って衆生済度のはたらきをするということになります。

六、善財は夜天善知識にどのようなことを問うたのか

諸善知識の中でもっとも経文の分量が多いのは、第五十三弥勒菩薩の箇所ですが、この九夜天の箇所も長々と説かれておりまして、そこに盛り込まれている仏教の問題も多岐にわたっているといえます。それを全体的に把握しようとすることは容易なことではありません。そこで、まず、善財は、夜天に対してどのようなことを問うているのかについて考えてみたいと思います。文脈でいえば「戊三」に相当します。

善財の問いは、一般的には次のような内容であると言えるでしょう。要約すれば、「私はこの上ない最高のさとりを求める心を発したのですが、いまだどのようなものが菩薩の行であり菩薩の道なのか分かりません。善知識よ、どうか教えてください。」というものです。しかし善財が諸善知識に問う場合に、微妙に問いの内容が異なっている例が見受けられます。また、そのことは、「戊一」の文脈の中で、前の善知識が善財に「次の善知識に会ってこういうことを尋ねなさい。」と指示した内容とも関わってきます。

そこで善財が第三十二婆娑婆陀夜天に問うた内容を挙げてみることにします。

我れ已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を発し善知識に因りて諸の仏法を得んことを信解せり。唯願わくは天神よ、一切智の道を開示し顕現したまえ。

(六十卷本『華嚴経』入法界品 大正蔵九・七二〇中 第三十二婆娑婆陀夜天の箇所)とあります。善財の問いは、一般的には「菩薩行」「菩薩道」を問うものでありましたが、ここでは「一切智の道」を開き示しそれを顕わにしてほしいというものになっています。中村元『広説仏教語大辞典』(六九頁)に「一切智

道」の項目がありまして、「一切智者の智の道」と説明されていますが、この意味に当てはまるのかは定かではありません。ただ、これに関してその後に示される経文の中に、

一切智道に安立する心を発さしめん

(六十卷本『華嚴經』入法界品 大正蔵九・七二〇下)

一切智の域に入らしめん

(六十卷本『華嚴經』入法界品 大正蔵九・七二一上 第三十二婆娑婆陀夜天の箇所)

などと説かれています。このことから見ると、善財が問うたことは、多くの衆生たちに仏の智慧をどのように獲得させるのかの道を尋ねているのではないかと思われます。

もう一つ善財の問いを挙げてみたいと思います。それは、善財が第三十三甚深妙徳離垢光明夜天に問うたものです。

天神よ、我れ已に阿耨多羅三藐三菩提心を発せるも、而も未だ菩薩は云何が菩薩の行を修して諸地を具足するや。

(六十卷本『華嚴經』入法界品 大正蔵九・七二二下 第三十三甚深妙徳離垢光明夜天の箇所)

とあります。ここでは菩薩行を修すること、どのようにしたら「諸地」を具足することができるのかが問われています。先の善財の問いが衆生に仏の智慧を獲得させようとする利他的な問いであったのに対して、ここでは菩薩行を修行することによって菩薩のどのような境地が開けてくるのかという自利的な内容をもった問いなのではないかと思われます。

このような意味で、善財の問い自身の中に、それぞれの善知識の教えの内容を知る手がかりが秘そんでいたので

はないかと思われれます。

七、夜天善知識の「所得の法門」と「経文の文脈」との符合

先ほど、第三十三甚深妙徳離垢光明夜天に対して善財が問うた内容に自利的な側面をもっているのではないかと述べました。そこで、この夜天が善財に説いた所得の法門について吟味してみたいと思います。ここの箇所は「四」の文脈に相当します。経文によれば、

善男子よ、我れ已に菩薩の寂滅定樂精進の法門を成就して、悉く三世の嚴淨せる仏利と一切諸仏と及び眷屬海と無量無辺の仏の神力海とを見たてまつる。仏の名号海と轉法輪海とを了知し分別し、彼の諸仏の寿命は無量、音声は微妙、法身は清淨にして法界に充滿せることを知り、亦、如来の一切の諸相に著せず。

(六十卷本『華嚴經』入法界品 大正藏九・七二三上 第三十三甚深妙徳離垢光明夜天の箇所)
と説かれています。これによってこの夜天の所得の法門が「菩薩の寂滅定樂精進の法門」と名づけられているものであることがわかります。『ざとりへの遍歴』上(三八七頁)では、この法門は、

静寂な禪定の安樂を普く歩行する(寂靜禪定樂普遊歩)という菩薩の解脱

『ざとりへの遍歴』第三十二章第二の夜の女神の箇所)
と表現されています。したがってこの法門には、「静寂な禪定の安樂」と「普く歩行する」ことを内容としていると考えられます。

唐法蔵の解釈によれば、この法門には、「寂滅定樂」と「精進」の二面が含まれていると指摘していると言えます。その上で法蔵は、先ほどの引用文であります「悉く三世の嚴淨せる仏利と一切諸仏と及び眷屬海と無量無辺の仏の

神力海とを見たてまつる。」以下の経文の文脈について、次のように解釈しています。

中において三あり。初には寂滅の義を釈し、二には禪樂の義、三には精進の義なり。

〔華嚴經探玄記〕卷十九、〔国訳一切経〕經疏部十、四二〇頁

甚深妙徳離垢光明夜天が善財に所得の法門を打ち明けた直後の経文（大正蔵九・七三上（下））には、最初に寂滅、次に禪樂、最後に精進の義が説かれているという解釈をしています。この経文を読むと、確かに四禅という禅定が説かれ、四正勤を説いていることから、法蔵の解釈は的を射たものではないかと考えられます。

ともすれば夜天の説く教えは、脈絡もなく続いているように考えがちですが、所得の法門の内容がある意図やねらいをもつて説かれていると考えられるのです。そのことは、私たちが「入法界品」を読むに先立ってすでに法蔵などの研究の蓄積があり、それなりの經典の読み込みがなされてきた歴史に負うところが多いと思います。

八、夜天善知識の教えと「十波羅蜜」

九夜天が説く教えはさまざまありますが、自らの「智慧」をみがくという側面と衆生済度の「慈悲」の面が表れていると思われます。これらの教えをすべて網羅することはできませんので、「十波羅蜜」の問題に焦点を当てて考えてみたいと思います。

夜天は、どのような修行を積み重ねてきたのかについて、第三十四喜目觀察衆生夜天の箇所（大正蔵九・七二五中）に、「十波羅蜜」のことが説かれています。

「檀波羅蜜」「尸波羅蜜」「羼提波羅蜜」「毘梨耶波羅蜜」「禪波羅蜜」「般若波羅蜜」「方便波羅蜜」「願波羅蜜」「力波羅蜜」「智波羅蜜」

(六十卷本『華嚴經』入法界品 大正藏九・七二五中 第三十四喜目觀察衆生夜天の箇所)

六十卷本『華嚴經』は旧訳の經典でありますから、「十波羅蜜」がこのような名前となっています。それらは、「布施」「持戒」「忍辱」「精進」「禪定」「智慧(般若)」「方便」「願」「力」「智」に相当するものであります。

『般若經』などの大乘經典には、しばしば「六波羅蜜」が説かれていますが、『華嚴經』では「十波羅蜜」が説かれます。なぜ「六」が「十」になったのかについては、一般的には第六の「般若波羅蜜」の内容を、「方便」「願」「力」「智」の四つに分けて説くと「十波羅蜜」ということになるかと説明されています。

『華嚴經』「十地品」には、菩薩十地が説かれそれらが「十波羅蜜」に対応するものであると示されていますが、そこでは「十波羅蜜」の内容がどのような中味を持っているのかは記されていません。それに対して「入法界品」ではなぜ「十波羅蜜」が説かれなければならないのか、なぜそれが必要となるのかについても触れているように思っています。

第三十六番目の善知識の寂靜音夜天の箇所では、「十の妙法」ということが説かれています。經文によれば、仏子よ、菩薩は十の妙法を修行するが故に此の法門を得たり。何等をか十と為す。

菩薩は布施を修行して一切衆生海をして皆悉く歡喜せしむ。

淨戒を修行して諸仏の功德の大海を成満す。

忍辱を修行して一切諸法の真性を了知す。

精進を修行して薩婆若に於いて堅固にして退かず。

禪定を修行して一切の衆生の煩惱を除滅す。

智慧を修行して一切の法海を分別し了知す。

方便を修行して一切の衆生海を教化し成熟す。

大願を修行して一切の仏刹海に於いて未來劫を尽くして菩薩の行を修す。

諸力を修行して念念の中に於いて一切の刹を現じて等正覺を成ず。

無尽智を修行して三世の法を了して障礙する所無し。

(六十卷本『華嚴經』入法界品 大正藏九・七三六上 第三十六寂靜音夜天の箇所)

ここでは、「波羅蜜」という言葉は表れていませんけれども、菩薩がどのようなことを修行してどのようなものを獲得するのかということがわりと詳しく示されているということになります。

また寂靜音夜天の箇所では、さまざまな煩惱にまとわれている衆生たちに「十波羅蜜」を得させるのだと説かれています。この経文を要約しますと、

怒りの煩惱を起こす者のためには忍辱波羅蜜を得させる。

怠りなまける者のためには精進波羅蜜を得させる。

心が乱れた者のためには禪定波羅蜜を得させる。

智慧に暗い者のためには般若波羅蜜を得させる。(中略)

自分だけの安らかさを求めている者のためには大願を具えて一切に利益を与える。

心の劣れる者のためには力波羅蜜を得させる。

無智の者のためには智波羅蜜を得させる。

(六十卷本『華嚴經』入法界品 大正藏九・七三四下 第三十六寂靜音夜天の箇所)

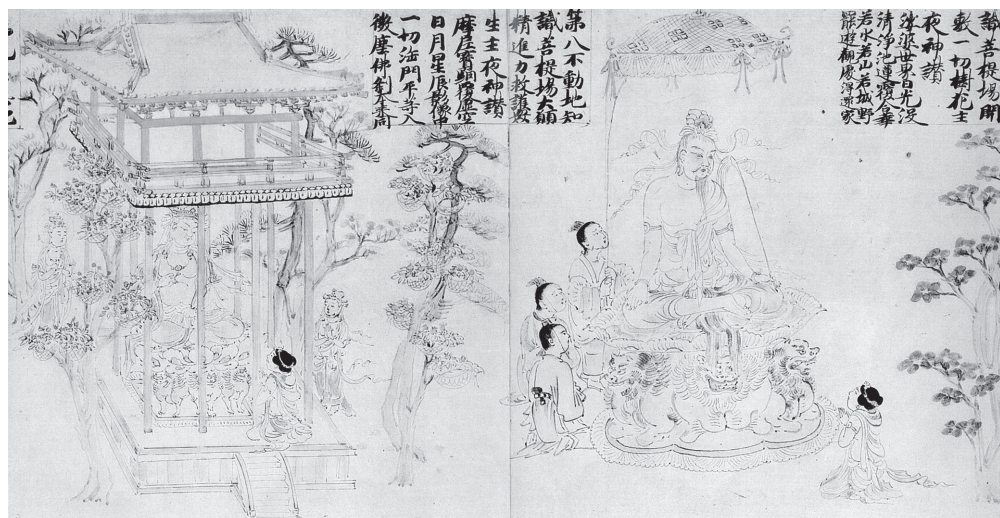
ということになります。このような「十波羅蜜」の問題は、第三十八開敷樹華夜天の箇所(六十卷本『華嚴經』入法

界品 大正藏九・七四一上(中)のところにもまた「十波羅蜜」が説かれることになるわけであります。「入法界品」にはしばしば「十波羅蜜」がよく出てくるわけです。

以上のようなことをまとめてみると、夜天善知識の教えには、しばしば「十波羅蜜」が説かれており、それが夜天自身の実践行であつたり、衆生たちを救済する実践行であつたりするのです。したがって、それは夜天善知識の教えの豊かな内容となっているものだと思うのであります。

九、第三十九善知識、願勇光明守護衆生夜天の過去世物語

善知識の語る過去世物語は、九人の夜天のそれぞれに表現されていますが、その語られる内容も、次第に複雑で詳細になっていくように見受けられます。分量もだいぶん増えてくるようなことになります。それで、第三十九善知識 願勇光明守護衆生夜天の過去世物語について触れたいと思います。【写真10】の『華嚴五十五所絵巻』では、真ん中に願勇光明守護衆生夜天があつて、多くの人たちが取り巻いている、そして獅子の上に座っていて、そこに善財童子が対座している、そういう場面が描かれています。これは、九夜天の第八番目の夜天が、願勇光明守護衆生夜天であります。八十巻本の『華嚴經』では、この善知識名が「大願精進力救護一切衆生主夜神」と名づけられています。善財童子は、この夜天に対して、「あなたの体得している法門の名はどのようなものか。道心(さとりを求める心)を発して以来どのぐらいの時間を経ているのか。あとどのぐらいの時間を経て無上菩提を完成させるのか。」といった趣旨のことを尋ねます。その問いに対して願勇光明守護衆生夜天は、まず、自分の体得している法門は、六十巻本『華嚴經』では、「隨応化覺悟衆生長養善根」であると説きます。「応化するに随いて衆生を覺悟させ善根を長養す」というような内容でしょうか。サンスクリット本の『さとりへの遍歴』下巻では、所得の法門は



【写真10】『華嚴五十五所絵巻』 東大寺蔵〔続日本絵巻大成〕10 中央公論社

「解脱」という言葉で表現されていますが、その『さとりへの遍歴』の方では、この所得の法門の内容について、「この解脱は、あらゆる衆生を成熟させ（彼らの願いに応じて目覚めさせ）善根を生み出すように勧告する（教化衆生令生善根）」と現代語訳されています。そして夜天は、次のように語ります。「汝の所問の如く、この法門を得しより幾の時と為すといわば、我れ、今仏の神力を承けて汝が為に解説せん。」（大正蔵九・七四七下）と。「あなたが問うように私がこの所得の法門を得てからのどのぐらいの時間がたつのか、そういった問題について私は仏の威神力を承けて、善財童子よ、あなたのために解説してあげよう。」というわけです。この経文以降から、この夜天の過去世物語が語られていくのであります。

この過去世物語のことについてであります。はるか過去世に「宝光世界」という世界があつて、「法輪音声虚空灯如来」という如来がおられた。その世界の王都に大王とその群臣（家臣）たちがいた。その国の大王は「勝光王」という名であつた。その国には、王様の治法（国を治める法律）を犯した人民たちがいて、牢獄に繋がれていた。その王様には一人

の王子がいて、「善伏太子」という名前であった。この過去世物語は、この善伏太子という王様の子どもが主人公であるといつてよいと思われます。善伏太子は、牢獄に繋がれている人民を救いたいと思い、父である王様にこの人民たちを解放してほしいと懇願しました。しかし王様の家臣たちは、人民を解放することには異議をとねえす。そこで善伏太子は、この牢獄に繋がれている人民たちがどのような境遇にあるのかについて述べています。この牢獄に繋がれている人民たちは、「貪愛」「愚癡」「智慧の光の無い」「福慧（福德と智慧）の無い」「憂悩（憂い悩み）に逼迫せられている」、そういう人民たちであつて、自分はこの人民たちを私の身命を捨ててまで救いたいと願っているわけでもあります。ここの経文の中に「不惜身命（身命を惜しまず）」という言葉が出てまいります。結局、「罪人たちを救つてほしい」と願ひ出た善伏太子自身も、牢獄の中に囚われの身となつてしまふのであります。「助けてやつてほしい」といつていたその罪によつて、牢獄の中に閉じ込められてしまふという事態が生ずるわけです。牢獄に囚われの身となつた善伏太子を見た母親、つまり皇后は、我が子を牢獄から解放してほしいと大王に懇願するのです。母親の懇願もあつて、善伏太子は嚴罰を受けるに先立って、しばしの間、「大施会（多くの人々に施しを行う法会）」を行うことが許されます。その「大施会」のときに善伏太子は、「法輪音声虚空灯如来」から「円満因縁修多羅」という教えを聞くことができました。善伏太子は、その「法輪音声虚空灯如来」から教えを聞いたことによつて「随応化覺悟衆生長養善根」という法門の境地を得たということです。現代世で夜天が獲得している法門の境地を、もうすでに過去世の時代にその如来から教えを聞くことによつてその境地を得たというように示されているわけであります。経文によれば、過去世の物語に登場する人物と現在世のありさまというものを、重ね合わせていくこととなります。過去世の「善伏太子」は、誰あろう、現在の「願勇光明守護衆生夜天」であるというのであります。つまり夜天である自分は、過去世では「善伏太子」という王子であつたというように重ね合わせられます。

す。しかも過去世に登場した人物たちが、現在世ではこの人々に相当するのだと重ね合わせられています。つまり、次のように対応するのです。

(過去世)の

「牢獄に繋がれている人民たち」

「勝光王という大王」

(現在世)の

「拘楼孫等の賢劫の千仏及び百万阿僧祇の大菩薩」

「薩遮尼犍子大論師」(ジャイナ教のニガンタ・ナータプッタ、六師外道の一人)

「調達(提婆達多)の眷属」

「大王の群臣たち」

「時の王の宮人、諸の眷属たち」

「尼犍子の六万の弟子たち」

「拘楼孫仏」というのは過去七仏の中の仏です。現在世に次から次へと出た仏陀やその仏のものと菩薩たち、これが過去世の「牢獄に繋がれている人民たち」に相当する。それから「勝光王」という善伏太子のお父さんの大王、これは現在世でいいますと、「薩遮尼犍子大論師」。これはジャイナ教のニガンタ・ナータプッタという人物であって、六師外道の一人に相当するのだと。それから過去世の「大王の群臣たち」、つまり勝光王という大王の家来の人たちは、現在世でいうなれば「調達」、つまり釈尊に反逆した提婆達多の仲間、眷属だと。それから過去世の「時の王の宮人(宮殿の人たち)や、宮殿の諸々の付き従っている人たち、この過去世の人たちは、現在世で言えば「尼犍子の六万の弟子たち」、つまりニガンタ・ナータプッタの弟子たちに相当するということに過去と現在とを重ね合わせているわけがあります。

「善伏太子」や「牢獄に繋がれている人民たち」がある面で正当な仏教的な側面をもったものであるのに対して、善伏太子を咎めようとしたタイプの人たちは、「外道の論師」であったり、釈尊に反逆する「提婆達多」であったり

というような重ね合わせ方が非常に巧みに表現されているわけであります。

願勇光明守護衆生夜天は、善財童子に自らの過去世を語ることを通して、現在世の所得の法門を得るに至った背景を語っていることになります。

終わりに

これまで、講演のテーマを掲げて、私の所見を述べてきました。「善知識の過去世物語」というところまでたどっていくのに、時間が掛かりすぎたかもしれません。少しまとめてみますと、夜天たちの居所が釈尊ゆかりの地であったことは、善財童子の求道の深まりの問題と重要に関わっているように思われるのです。そして、夜天善知識の教えの随所に「十波羅蜜」が説かれていることは、「入法界品」が示そうとする菩薩道の内容を性格づけるものではないかと思えます。そして、過去世物語ですが、現在世に生きる善知識は、自らの過去世の計り知れないほどの背景を語ることに、仏教を学び続けてきた善知識の教えの大切さを、より重厚なものにしているのではないかと思うのです。しかも、過去世の人物と現在世の人物の重ね合わせ方も、誠に巧みに表現していることに驚かされるのであります。

以上までが、今回の講演の趣旨といったところです。加えて、少し研究上の疑問点などについて述べさせていただきます。「入法界品」の漢訳とサンスクリット語のテキストの問題についてのいくつかの問題があるように思われます。先ほどの『さとりの遍歴』という書物は、サンスクリット語の現代語訳の出版ということで、私たちに非常に恩恵を与えるものですが、一般の読者のことを視野に入れているためか、詳細な「註」が省略されています。漢訳テキストとの異同がある場合に、その異同の指摘や、どうしてそうなるのかといった問題には触れられていま

せん。

真野龍海氏による何人かの善知識の箇所を取り上げた論文⁽¹⁾がありますが、サンスクリット語からの忠実な日本語訳となっているため、こういった問題についてはあまり触れていません。

また、先ほどの花園大学におられた小林円照氏には、「アジアを駆け巡る善財童子『華嚴經入法界品』の思想と文化」などのいくつかの論文があつて、インド仏教の研究側からの「入法界品」解釈が試みられています。その例を少し挙げ、漢訳の研究からの相違点を少し挙げてみたいと思います。

①「入法界品」の仏の会座である祇園精舎にいた仏のことを「獅子座にすわる毘盧舍那」(前掲論文七頁)と捉えられていること。漢訳では「世尊」と表現されているだけに、なぜ、これが「毘盧舍那」仏なのかという問題があります。

②善財童子が「長者」の子であることと関連して、「入法界品」という「この経が成立した環境には、「富」に深い関心を持つ人々があつたと推察される。」(前掲論文十一頁)という指摘です。これは、「長者」という存在と「入法界品」の成立との関わりをどう考えたらよいのかという問題です。どうしてそのような「長者」ということに注目されるのかという問題です。

③漢訳では第五番目の善知識であります「第五良医弥伽」がサンスクリット語訳では「ドラヴィダ人メーガ」(前掲論文十二頁)となっていて、漢訳では「良医」とあるものが「ドラヴィダ人(インドの土着の民族の人)」だと指摘されていることです。これは、漢訳とサンスクリット語訳との異同の問題として、そういう違いがあるということです。

④漢訳の第二十三自在海師のことを、「自在海師(ダーシャ)は隸民(ダーサ)の可能性もあるが」(前掲論文十二

頁」というふうに小林氏は指摘しておられますが、これも漢訳の方からみれば、「隸民」というような言葉は出ていませんで、そういった漢訳とサンスクリット語との異同、そういった面があるということです。

そのようなことから考えますときに、漢訳を中心にして「入法界品」を読んでいく研究と、サンスクリット語の「入法界品」を中心に研究していくその双方の間に研究の突き合わせがなかなかできていないでいる現状が、今挙げたような相違点のようなかたちであらわれているように思われます。

過去世物語というものは、五十五人の善知識の全部のところに示されているわけではありません。「入法界品」の善知識の菩薩道の、ある面で深まりが見られてくる夜天のところ、そのあたりで非常に豊かな表現をもって過去世物語が示されておりまして、その過去世物語に登場する人物と現在世の人物像とを重ね合わせながら非常に巧みに表現されているところに、「入法界品」の豊かな表現、豊かな説き方があるように感ずるのであります。

註

- (1) 真野龍海「梵文『入法界品』第12 14 15 16章(試訳)」「(佐藤隆賢博士古希記念論文集 仏教教理・思想の研究) 平成十年五月 山喜房佛書林刊)
真野龍海「梵文『入法界品』第21 22章(試訳)」「(香川孝雄博士古稀記念論文集 仏教学浄土学研究) 二〇〇一年三月 永田文昌堂刊) など。

一 文殊師利菩薩

同上

同上

(三)文殊菩薩と善財童子の出会い

二 功德雲比丘

徳雲比丘

吉祥雲比丘

第一章 メーガシユリー比丘

三 海雲比丘

同上

同上

第二章 サーガラメーガ比丘

四 善住比丘

同上

妙住比丘

第三章 スプラティシユティータ比丘

五 良医弥勒

弥勒

弥勒大士

第四章 ドラヴィダ人メーガ

六 解脱長者

同上

同上

第五章 ムクタカ長者

七 海幢比丘

同上

同上

第六章 サードヴァジャ比丘

八 休捨優婆夷

同上

伊舍那優婆夷

第七章 アーシャー優婆夷

九 毘目多羅仙人

毘目瞿沙仙人

大威猛声仙人

第八章 ビーシユモーツタラニルゴーシャ仙人

一〇 方便命婆羅門

勝熱婆羅門

同八十卷

第九章 ジャヨーシユマーヤタナ婆羅門

一一 弥多羅尼童女

慈行童女

同八十卷

第十章 マイトラーヤニー童女

一二 善現比丘

善見比丘

妙見比丘

第十一章 スダルシヤナ比丘

一三 釈天主童子

自在主童子

根自在主童子

第十二章 インドリエーシユヴァラ童子

一四 自在優婆夷

具足優婆夷

弁具足優婆夷

第十三章 プラブーター優婆夷

一五 甘露頂長者

明智居士

具足智長者

第十四章 ヴイドヴァーンス家長

一六 法宝周羅長者

法宝髻長者

尊法宝髻長者

第十五章 有徳の長者ラトナチユード

一七	普眼妙香長者	普眼長者	同八十卷	第十六章	香料商サマンタネートラ
一八	滿足王	無厭足王	甘露火王	第十七章	アナラ王
一九	大光王	同上	同上	第十八章	マハープラバ王
二〇	不動優婆夷	同上	同上	第十九章	アチャラー優婆夷
二一	隨順一切衆生出家外道	遍行出家外道	同八十卷	第二十章	遊行者サルヴァガーミン
二二	青蓮華香長者	優鉢羅華鬘香長者	具足優鉢羅華鬘香長者	第二十一章	香料商ウトバラブーティ
二三	自在海師	婆施羅船師	同八十卷	第二十二章	船頭ヴァイラ
二四	無上勝長者	同上	最勝長者	第二十三章	ジャヨロットタマ長者
二五	師子奮迅比丘尼	師子頻申比丘尼	同八十卷	第二十四章	シンハヴィジュリンピター比丘尼
二六	婆須蜜多女	同上	伐蘇蜜多女	第二十五章	遊女ヴァスミトラ
二七	安住長者	鞞瑟胝羅居士	鞞瑟底羅居士	第二十六章	ヴェーシユティラ家長
二八	觀世音菩薩	觀自在菩薩	同八十卷	第二十七章	觀世音菩薩
二九	正趣菩薩	同上	正性無異行菩薩	第二十八章	アナニヤガーマン菩薩
三〇	大天	大天神	同八十卷	第二十九章	マハーデーヴァ神
三一	安住道場地神	安住主地神	自性不動主地神	第三十章	大地の女神スターヴァラー
三二	婆娑婆陀夜天	婆珊婆演底主夜神	春和主夜神	第三十一章	第一の夜の女神ヴァーサンティ
三三	甚深妙德離垢光明夜天	普德淨光主夜神	普遍吉祥無垢光主夜神	第三十二章	第二の夜の女神
三四	喜目觀察衆生夜天	喜目觀察衆生夜神	喜目觀察一切衆生主夜神	第三十三章	第三の夜の女神

各種テキスト善知識対照表

三五	妙徳救護衆生夜天	普救衆生妙徳夜神	普救護一切衆生威徳吉祥主夜神	第三十四章	第四の夜の女神
三六	寂靜音夜天	寂靜音海主夜神	具足功徳寂靜音海主夜神	第三十五章	第五の夜の女神
三七	妙徳守護諸城夜天	守護一切城増長威力主夜神	守護一切城増長威徳主夜神	第三十六章	第六の夜の女神
三八	開敷樹華夜天	開敷一切樹華主夜神	能開敷一切樹華安樂主夜神	第三十七章	第七の夜の女神
三九	願勇光明守護衆生夜天	大願精進力救護一切衆生夜神	守護一切衆生大願精進力光明夜神	第三十八章	第八の夜の女神
四〇	妙徳円満天	妙徳円満神	妙威徳円満愛敬神	第三十九章	ルンビニーの森の女神
四一	瞿夷夫人	瞿波夫人	同八十卷	第四十章	シャカ族の女ゴーパー
四二	摩耶夫人	同上	同上	第四十一章	菩薩の母マヤー王妃
四三	天主光童女	天主光女	同八十卷	第四十二章	天の娘スレーンドラーパー
四四	遍友童子師	同上	同上	第四十三章	ヴィシュヴァーミトラ童師
四五	善知衆芸童子	同上	同上	第四十四章	長者の子シルパービジュニヤ
四六	賢勝優婆夷	同上	最勝賢優婆夷	第四十五章	バドローツタマー優婆夷
四七	堅固解脱長者	同上	同上	第四十六章	金細工師ムクタースーラ
四八	妙月長者	同上	同上	第四十七章	スチャンドラ家長
四九	無勝軍長者	同上	同上	第四十八章	アジタセーナ家長
五〇	尸毘最勝婆羅門	最寂靜婆羅門	同八十卷	第四十九章	シヴァラーグラ婆羅門
五一	徳生童子	同上	同上	第五十章	シユリーサンバヴァ童子とシユリーマテイ童女

五五	五四	五三	五二
普賢菩薩	文殊師利菩薩	弥勒菩薩	有徳童女

同上	同上	同上	同上
----	----	----	----

同上	同上	同上	同上
----	----	----	----

第五十三章	第五十二章	第五十一章
普賢菩薩—普賢行の誓願	文殊菩薩	弥勒菩薩

六十卷本「入法界品」の善知識

	善知識名	『国訳大藏経』第七巻 頁	場所名	所得の法門名
1	文殊師利菩薩	p.181	覺城の東、莊嚴幢婆羅林の中の大塔廟処	普門光明觀察正念諸仏三昧
2	功德雲比丘	p.183	可樂国の和合山	普眼經
3	海雲比丘	p.186	海門国	菩薩無礙法門
4	善住比丘	p.192	海岸国	菩薩所言不虛法門
5	良医弥伽	p.196	自在国の呪藥城	如來無礙莊嚴法門
6	解脫長者	p.200	住林国	清淨光明般若波羅蜜三昧法門
7	海幢比丘	p.207	莊嚴閻浮提出頂国	離憂安隱幢法門
8	休捨優婆夷	p.217	海潮国の普莊嚴林	菩薩無壞幢智慧法門
9	毘目多羅仙人	p.225	海潮国	菩薩無尽法門
10	方便命婆羅門	p.229	進求国	般若波羅蜜普莊嚴法門
11	弥多羅尼童女	p.239	師子奮迅城	隨順菩薩灯明法門
12	善現比丘	p.244	救度国	巧術智慧法門
13	釈天主童子	p.247	輪那国	無尽功德莊嚴法門
14	自在優婆夷	p.249	海住城	如意功德宝藏法門
15	甘露頂長者	p.253	大興城	滿足大願法門
16	法宝周羅長者	p.258	師子重閣城	令一切衆生歡喜普門法門
17	普眼妙香長者	p.261	実利根国の普門城	菩薩幻化法門
18	滿足王	p.264	滿幢城	菩薩大慈幢行三昧
19	大光王	p.267	善光城	菩薩無壞法門
20	不動優婆夷	p.273	安住城	菩薩至一切処行法門
21	隨順一切衆生出家外道	p.281	不可称国の知足城	知一切諸香
22	青蓮華香長者	p.284	甘露味国	大悲幢淨行法門
23	自在海師	p.287	樓閣城	至一切趣菩薩淨行莊嚴法門と無依無作之力
24	無上勝長者	p.290	可樂城	菩薩一切智底法門
25	師子奮迅比丘尼	p.293	難忍国の迦陵伽婆提城	離欲實際清淨法門
26	婆須蜜多女	p.300	險難国の宝莊嚴城	不減度際菩薩法門
27	安住長者	p.304	首婆波羅城	

	善知識名	『国訳大藏經』第七卷 頁	場所名	所得の法門名
28	觀世音菩薩	p.386	南方の海上、光明山	菩薩大悲法門光明行
29	正趣菩薩	p.389	東方の金剛山の頂	菩薩普門速行法門
30	大天	p.312	婆羅波提城	菩薩雲網法門
31	安住道場地神	p.314	摩竭提国	菩薩不可壞藏法門
32	婆娑婆陀夜天	p.316	迦毘羅婆城	菩薩光明普照諸法壞散衆生愚ち法門
33	甚深妙德離垢光明夜天	p.326	摩竭提国	菩薩寂滅定衆精進法門
34	喜目觀察衆生夜天	p.331	去此不遠、如來石面	菩薩普光喜幢法門
35	妙德救護衆生夜天	p.350	此佛衆中	教化衆生菩薩法門
36	寂靜音夜天	p.373	於此道場去我不遠	無量歡喜莊嚴法門
37	妙德守護諸城夜天	p.386	此道場上如來衆中	甚深妙德自在音声法門
38	開敷樹華夜天	p.397	此佛衆中	無量歡喜知足光明法門
39	願勇光明守護衆生夜天	p.418	於此道場	隨心化覺悟衆生長養善根法門
40	妙德円滿天	p.439	流弥尼園林	菩薩受生自在法門
41	瞿夷夫人	p.454	迦毘羅城	分別觀察一切菩薩三昧海法門
42	摩耶夫人	p.480	迦毘羅城	大願智幻法門
43	天主光童女	p.495	三十三天	無礙念清淨解脫
44	遍友童子	p.497	迦毘羅城	善知衆芸より菩薩の字智を学べり
45	善知衆芸童子	p.498	此(迦毘羅城)	善知衆芸菩薩解脫
46	賢勝優婆夷	p.501	摩竭提国の婆咄那城	無依処道場法門
47	堅固解脫長者	p.502	(南方) 為沃田城	無著清淨念解脫
48	妙月長者	p.503	此城(為沃田城)	淨智光明解脫
49	無勝軍長者	p.504	(南方) 出生城	無尽相解脫
50	尸毘最勝婆羅門	p.504	此城の南の法聚落	誠願語法門
51	德生童子	p.505	(南方) 妙意華門城	幻住解脫
52	有德童女	p.505	(南方) 妙意華門城	幻住解脫
53	弥勒菩薩	p.507	海潤国の大莊嚴蔵園林の嚴淨蔵楼觀	
54	文殊師利菩薩	p.571	經遊百一十城、到普門城辺	
55	普賢菩薩	p.573	金剛蔵道場	

サンスクリット本「入法界品」の善知識

	善知識名	【とりへの遍歴】 上下頁	場所名	所得の法門名
1	文殊菩薩	上 P. 94	タニヤーカー(福城)の東、ヴィチトラサ ーラ・ドヴァジャヴェーハ(多様な娑羅 樹の幢の莊嚴、莊嚴幢娑羅)林の塔廟 ラーマヴァーラント(可樂国)のスクリ ーヴァ山(妙峰山)	一切(諸仏)の境界を顕現させ、(その)集合す る様を(照らし出す) 普門の光明という念仏 (門) (憶念一切諸仏境界智慧光明普見法門)
2	メーガシユリー(徳雲)比丘	上 P. 108	サーガラムカ(海門) 国	普き眼(普眼)という法門
3	サーガラメーガ(海雲)比丘	上 P. 114	サーガラテーラ(海岸) 国	無礙の門という菩薩の解脱(無礙解脱門)
4	スプラティシユティタ(善住)比丘	上 P. 124	ヴァジュラブラ(自在城) というドラヴ イダー人の町	菩薩たちのこのような妙音陀羅尼光明(法門)
5	ドラヴィダーメーガ(弥伽)	上 P. 132	ヴァナヴァーシン(住林) という地	無礙莊嚴という如来の解脱
6	ムクタカ(解脱)長者	上 P. 140	ミラスバラナとよばれるジャンプ州の先 端(莊嚴閻浮提頂)	般若波羅蜜は普眼の平等心を得る(普眼捨得) とよばれ、この三昧は、その光明であり、普門 清淨の莊嚴(清淨莊嚴普門)という名である
7	サーラドヴァジャ(海幢)比丘	上 P. 152	サムドラヴェーターデー(海潮) 地方 のマハーブラバ(円満光) という都城の東、 サマンタヴェーハ(普莊嚴) という園林	無敵の旗印(無壊幢) という菩薩の解脱
8	アーシヤー(休捨) 優婆夷	上 P. 173	イーシヤーナ(伊沙那) という国	無尽の輪(マンダラ)(無尽輪) という菩薩の解脱
9	ピーシュモッタラニルゴーシ ヤ(毘目瞿沙) 仙人	上 P. 190	シンハヴィジュリンビタ(師子奮迅) と いう都城	普き莊嚴という般若波羅蜜の(法) 門 (般若波 羅蜜普莊嚴[法] 門) の転回
10	ジャヨーシユマーヤタナ(勝熱) 婆羅門	上 P. 198	トリナヤナ(三眼) という国	消えることのない智の灯火というこの菩薩の解脱
11	マイトラヤーニー(慈行) 童女	上 P. 210	シユラマナマンダラ(円満多聞) 国のス ムカ(妙門) という名の都城	薩の智の光明
12	スタルシヤナ(善見)比丘	上 P. 216	サムドラプラティスターナ(海住)とい う都城	無尽の莊嚴の福德の宝庫(無尽莊嚴福德蔵)と いう菩薩の解脱
13	インドリエーシユヴァラ(根自 在主) 童子	上 P. 223		
14	ブラブター 優婆夷	上 P. 229		

	善知識名	「さとりへの遍歴」 上下 頁	場所名	所得の法門名
15	ヴィドヴァーンス (明智) 家長	上 P.239	マハーサンバヴァ (大興) という都城	心の宝庫から生じる福德 (隨意出生福德蔵) という解脱
16	有徳の長者ラトナチュダ (法宝髻)	上 P.247	シンハポータ (師子宮) という都城	無礙なる誓願の輪の莊嚴 (無障礙願普遍莊嚴福德蔵) という菩薩の解脱
17	香料商サマンタネートラ (普眼)	上 P.253	ヴェートラムーラカ (藤根) という国のサマンタムカ (普門) という都城	一切の衆生を満足させ、普き方位の諸仏にまみえ、供養し、奉仕することができる香玉 (令一切衆生普見諸仏承事供養歡喜法門)
18	アナラ (無厭足) 王	上 P.260	タールドヴァジャ (多羅幢) という都城	幻 (如幻) という菩薩の解脱
19	マハーブラバ (大光) 王	上 P.269	スブラバ (妙光) という都城	大慈の旗印という菩薩行 (大慈幢行)
20	アチャラー (不動) 優婆夷	上 P.284	ステイラー (安住) という王都	無敵の智の蔵 (智慧蔵) という菩薩の解脱
21	遊行者サルヴァガーミン (遍行)	上 P.297	アミタトーサラ (無量都薩羅) という国のトーサラ (都薩羅) という都城	あらゆる (衆生) に合わせる (至一切処) 菩薩行
22	香料商ウトバプリーティ (優鉢羅華)	上 P.302	プリトラージュトラ (廣大) という国	すべての香料を知っている
23	船頭ヴァイラ (婆施羅)	上 P.307	クータガラ (樓閣) という都城	大悲の旗印という菩薩行を清浄にしながら住んでいる
24	ジャヨットタマ (無上勝) 長者	上 P.311	ナンディハーラ (可樂) という都城	何ものをも依り所としない、業をつくることのない神通によって得た力によって、あらゆる所に赴く菩薩行の門 (至一切処菩薩行門) を清浄にする
25	シンハヴィジュリンピター (師子奮迅) (比丘尼)	上 P.317	シユローナパラインタ (輪那) という国のカリンガヴァアナ (迦陵迦林) という都城	一切の慢心を打ち破る (除滅一切微細分別門) という菩薩の解脱
26	遊女ヴァスミトラ (婆須蜜多)	上 P.331	ドゥルガ (險難) という国のラトナヴェーハ (宝莊嚴) という都城	離欲の究極を究めた (離貪欲際) という菩薩の解脱
27	ヴェーシシュティラ (毘瑟底羅) 家長	上 P.338	シユババーランガマ (淨達彼岸) という都城	不究尽の果て (不滅度際) という菩薩の解脱
28	観世音菩薩	上 P.343	ポータラカ (補陀洛迦) という山	遲滞のない大悲の門という菩薩行の門
29	アナニヤガーミン (正趣) 菩薩	上 P.352	アナニヤガーミン (正趣) 菩薩が東方から天穹を通じて、娑婆世界の鉄圀山の山頂に降り立ち、かのポータラカ山にいる観世音菩薩の下に近づく	普門より速やかに赴く (普門速疾行) という菩薩の解脱

39	38	37	36	35	34	33	32	31	30
第八の夜の女神サルヴァアジャガッド・ラクシャサー・プラニダーナ・ヴィーリヤブラバー（あらゆる衆生の守護を誓願する精進の光明、願勇光明守護衆生）	第七の夜の女神サルヴァヴリクシャ・ブラブッラナスカ・サンヴァーサー（あらゆる木々の開華の安楽とともにある、能開敷一切樹花安楽主）	第六の夜の女神サルヴァナガラ・ラクシャサーサンバヴァ・デージャッハシュリー（あらゆる都城を守護できる威力の栄光、守護一切増長威徳主）	第五の夜の女神ブラシヤンタルタ・サーガラヴァアティー（寂靜音海夜神）	第四の夜の女神サマンタサットヴァ・トラノージヤッハシュリー（普く衆生を救護する勢力の栄光、普救衆生妙徳）	第三の夜の女神ブラムデイタ・ナヤナ・ジャガッドヴィローチャナー（喜目觀察衆生）	第二の夜の女神サマンタガンピラ・シユリーヴィマラブラバ（普徳浄光）	第一の夜の女神ヴァーサンテイ（春和）	大地の女神スターヴァラー（安住）	マハーデーヴァ（大天）神
下 P.120	下 P.79	下 P.64	下 P.41	上 P.425	上 P.391	上 P.383	上 P.364	上 P.360	上 P.356
いの菩提道場に	いのなる毘盧遮那世尊の足下に	いの菩提道場において	いの菩提道場の上に	この如来の説法会の（私の）すぐ隣に	毘盧遮那（如来）の菩提道場の右側にいる私のすぐ横に	マガタ国の菩提道場	マガタ国のカピラヴァストゥ（迦毘羅）という都城	マガタ国の菩提道場	ドウヴァーラヴァアティー（門主）という都城
不可思議な菩薩の解脱、この解脱は、あらゆる衆生を成熟させ、（彼らの願いに応じて目覚めさせ）善根を産み出すように勧告する（教化衆生令生善根）という名である	広大な喜びを産み出す大満足の光明（出生広大歓喜光明）という菩薩の解脱	心に適った音声の深遠な神変に入る（甚深自在可愛妙音）という菩薩の解脱	広大な歓喜の衝動を生じる心利那の莊嚴（念念出生広大歓喜莊嚴）という菩薩の解脱	一切世間に現前して（如来が）世の衆生を教化する様子を示現する菩薩の解脱（調伏一切衆生解脱門）	普く優れた喜びの広大で無垢の勢いの幢という菩薩の三昧（大勢力普喜幢解脱門）	静寂な禪定の安楽を普く歩行する（寂靜禪定楽普遊歩）という菩薩の解脱	明）という菩薩の解脱	不屈の智の蔵（難摧伏智慧蔵）という菩薩の解脱	雲の網という菩薩の解脱

	善知識名	【文】への遍歴 上下 頁	場所名	所得の法門名
40	ルンビニーの夜の女神ステージ ヨーマンダラ・ラティシユリー (すばらしい威光の輪の歓喜の栄 光、妙徳圓滿愛敬)	下 P.159	ルンビニーの森(嵐毘尼林)	無量劫に亘り一切の境界における菩薩誕生の神 変を再現するという菩薩の解脱(自在受生解脱 門)
41	シヤカ族の女ゴーバー(瞿波)	下 P.187	大都カピラヴァストゥ	すべての菩薩の三昧の海の真理の觀察の境界と いう菩薩の解脱(観一切菩薩三昧境界海解脱 門)
42	菩薩の母マヤー(摩耶)王妃	下 P.251	この同じ(世界)に、毘盧遮那世尊の足下 に	偉大な誓願の智の幻の莊嚴(大願智幻莊嚴)と いう菩薩の解脱
43	天の娘スレーンドラーバー(天 主光)	下 P.283	三十三天の宮殿に	無礙の憶念の清浄なる莊嚴(無礙念清浄莊嚴) という菩薩の解脱
44	ヴィシユヴァーミトラ(遍友)童 子師	下 P.286	大都カピラヴァストゥに	ここにシルバービジュニヤ(善知衆芸)という 長者の子がいて、菩薩から文字に関する知識 (字智)を学んでいます
45	長者の子シルバービジュニヤ (善知衆芸)	下 P.288	いかに	技芸に通じた(善知衆芸)という菩薩の解脱
46	バドロットタマー(最勝賢)優 婆夷	下 P.294	マガダ(摩竭提)国のケーヴァラカ(有 義)地方のヴァルタナカ(婆咄那)という 都城	無依処の輪(マンダラ)(無住処無尽輪)という 法門
47	金細工師ムクターサーラ(堅固 解脱)	下 P.296	かの南の地方のバルカッチャ(沃田)と いう都城	無礙の憶念の莊嚴(無著念清浄莊嚴)という菩 薩の解脱
48	スチャンドラ(妙月)家長	下 P.297	バルカッチャという都城	汚れなき智の光明(無垢智光明)という菩薩の 解脱
49	アジタセーナ(無勝軍)家長	下 P.299	この南の地方のロールカ(広大声)とい う都城	無尽の相(無尽相)という菩薩の解脱
50	シヴァラーグラ(最寂靜)婆羅 門	下 P.300	この南の地方のダルマ(達磨)村	真実語の決断
51	シユリーサンバヴァ(徳生)童子	下 P.301	この南の地方のスマナムカ(妙意華門) という都城	幻(幻住)という菩薩の解脱

55	54	53	52
普賢菩薩	文殊師利菩薩	マイトレーヤ(弥勒)菩薩	シュリーマテイ(有徳)童女
ト P.414	ト P.411	ト P.304	下 P.302
菩提道場	ヴァジユラサーガラガルバ(金剛海蔵) マナームカ(蘇摩那城)という所に至る 百十の都城を遊行した後、(普門国)のスマナームカ(妙意華門)	この南の地方にサムドラカッチャという土地があり、そこにマハーヴューハ(大莊嚴)という遊園があり、その中にはヴァイローチャナ・ヴューハーランカーラ・ガルバ(毘盧遮那莊嚴蔵)という大樓閣がある	この南の地方のスマナームカ(妙意華門)という都城 幻(幻住)という菩薩の解脱